

タイトル	創刊のことば
著者	菱川，善夫
引用	北海学園大学人文論集，1： i - ii
発行日	1993-11-30

創刊のことば

人文学部長 菱 川 善 夫

北海学園大学の長年の念願であった人文学部が、一九九三年四月から、無事にその第一歩を踏みだすことができた。開設までの道のりは遠く、さまざまな困難が待ち受けていたが、その間、各方面から賜った多大の御支援に対し、あらためて感謝を申しあげたい。この記念すべき年に、人文学部の最初の学問的成果である紀要の第一集を発行することができたことは、われわれにとっての大きな喜びである。

人文主義の運動は、ルネッサンス期に全ヨーロッパを蔽った思潮として知られているが、ギリシャ、ラテンの文書解読と、思想研究に根をおろした理性による人間性の復権は、教會的権威のもとに窒息していた人々を救い、学問によるヒューマニズムの確立の基礎をつくった。その思潮は、近代のヒューマニズム思想を経て、現代へと受けつがれている。

しかし二〇世紀の合理主義的な思考と、技術中心主義の現代文明は、この人文主義がうみだした理性の遺産を、辺境へと追いやっているように見える。二十一世紀に、いかなる人文主義の確立が必要なのか、二十一世紀を目前にして、人類に問われているのはその課題であろう。

北海学園大学人文学部は、教育と研究を通して、そのような人類学的課題にこたえうる、学問や文化理論の創造をめざしたいと願っている。そのためには、当然のことながら、教員の一人ひとりが、自己の研究領域での学問的実践者であると同時に、それだけにとどまらぬ、広い文化的、人類学的識見を持つことが大切である。人文学部の紀要は、第一に、そのための大切な〈場〉としての役割をになうものでなくてはならない。個人研究の充実がないところに、人文学部そのものの発展もあり得ないのは自明のことである。人文学部においては、全員がこの紀要に執筆することを原則とし

たのもそのためだ。

しかし、各自の研究領域の独自性の尊重が、個人研究の枠組の中にとどまって、閉鎖性を強調するのはかんばしいことではない。相互の個人研究が刺激的な対話をうみだし、そこから、自発的な共同研究へとつながっていくことが、人文学部にとっては、特に大切なことだと私は考えている。それはカリキュラムの策定のうえにも、学部のイメージの刷新のためにも、必ず好ましい影響を与えることになるだろう。

もとより共同研究の成果が、短期間のうちに実現するとは思われないから、その成果が紀要に掲載されるまでには、それなりの歳月を必要とする。しかし、小さな成果より、たとい仮説の提示だけに終わっても、その実証のための研究が、新しい光の渦をまきおこし、さらに大胆な研究をうながしていくような、そういう共同研究がうまれてほしいと願っている。紀要は、そのような共同研究のための〈場〉でもなくてはならない。

ともあれ、私はこの紀要が、今日の新しい学問創造の発展につながるとともに、文明や文化のあり方にも反省を加え、かつ北海道の文化創造にも、十分貢献できるものになるものと確信している。そのためにも、学術論文集といった既成の概念にとらわれることなく、清新柔軟な発想によって、この紀要がひろい分野からの評価にたえられるものになるよう、強く期待するものである。